

## もくじ

- P 1 研修会実施報告
- P 2 活動報告〈Seeds〉
- P 3 里山の生き物を救う「お助けシュロの糸」〈日本自然保護大賞受賞〉
- P 4 忍び寄る外来生物の影

## 支援員研修会の開催結果

### 〈第1回研修会〉

- ◇日 時：平成26年10月4日（土） 9：50～16：00
- ◇場 所：らんかん高原交流センター、宇佐川周辺（岩国市錦町）
- ◇参加者：18名
- ◇内 容

午前中は、らんかん高原交流センター（らんかん高原オートキャンプ場内）で、高川学園の村田満氏による「錦川のオオサンショウウオについて」、錦川流域ネット交流会の白井啓二氏による「オオサンショウウオの保護活動等について」の講義を行い、午後からは、オオサンショウウオの生息が確認されている宇佐川堰堤に移動し、高川学園の村田先生と生徒さんが川に入って捕獲したオオサンショウウオを実際に観察した。また、オオサンショウウオの緊急保護施設において、保護飼育されているオオサンショウウオを観察した。

- ◎ 講義では、村田氏より「錦川のオオサンショウウオについて」、大きさや生息場所、個体数、生態等や、生息状況調査の方法、内容、捕獲する道具の使い方、巣穴等について説明があった。また、白井氏より錦川流域ネット交流会の活動状況やオオサンショウウオの調査保護活動等について説明があった。宇佐川堰堤下のオオサンショウウオは極度に痩せており、死ぬ直前であったため、緊急避難するため小学校の廃校に保護施設（飼育水槽）を設置し2年間飼育している。22匹全部が元気に育っており、健康な状態になったので宇佐川に放流を始めている。
- ◎ 午後は宇佐川堰堤に移動し、川に降りて、高川学園の生徒さんが川に入ってオオサンショウウオを捕獲する様子や捕獲したオオサンショウウオを身近に観察した。
- ◎ 緊急保護施設が設置してある廃小学校では、飼育容器（ポリ容器）の設置状況や飼育の様子、容器内のオオサンショウウオを観察した。



### 〈第2回研修会〉

- ◇日 時：平成26年11月8日（土） 10：00～15：30
- ◇場 所：つのしま自然館、牧崎風の公園（下関市豊北町角島）
- ◇参加者：10名（県民34人）
- ◇内 容

午前中は、つのしま自然館で、豊北町自然観察指導員会の小林知吉氏による「角島の自然環境について」と「砂のつぶやき」の講義を行い、午後からは、牧崎風の公園に移動し、豊北町自然観察指導員会の小林氏、藤岡氏、阿野氏の指導でダルマガキ等を観察した。

- ◎ 講義では、小林氏より「角島の自然環境について」、角島の地質（牧崎の柱状節理など）やハマオモト、ルリハコベ、ハマウツボなどの植物、ユリヤガイ、タツナミガイ、ツノシマクジラなどの海の生きもの、ミサゴ、ハヤブサ、ミヤマガラスなどの鳥類などについて説明があった。



次に、県内の砂浜について、組成（大浜海岸は貝殻が多い）や鳴き砂の条件等、砂浜の生きものや砂浜の役割（稚魚の生息地、産卵場）、砂浜の植物について説明があった。また、大浜海岸に出て30分程度ユリヤガイを探したが、中には1人で6個見つけた参加者もいた。



◎ 午後からは牧崎風の公園に移動し、公園内でダルマガクを観察した。また、無井港付近から歩きながらシマカンギク、ムサシアブミ、カラスウリ、ハマウドなども観察した。

## 〈活動団体報告〉

## 『お山の学校』で耳をすまそう

シーズ

Seeds（柳井市日積）

企画部長 宮本 剛

『お山の学校』と親しみを込めて呼ぶその森のフィールドは、私たち大人の遊び場であると共に子どもたちに本当の夢を見せるための魔法の空間である。



由緒ある八幡宮に連なる長い馬場の北側には、かつて尋常小学校の校舎が建っていた。戦前から昭和20

年代まで、私たちの父や祖父たちが通った学校である。その学校は後、鎮守の森の麓に移設され、学校跡地は50年以上に亘って捨て置かれていた。結果、雑木と孟宗竹が繁茂するジャングルと化した。平成15年3月、移設後の小学校が廃校となった年、私たちは地域の活性化を目的としたグループを設立、廃校舎の施設と校地を活用しながら都市農村交流や3世代交流を中心とした事業に取り組むことを決めた。その後、もっと地域の資源を活かした活動をしようという欲求が高まり、平成18年4月に里山再生事業に着手、旧跡地を『お山の学校』と命名、以来、伐竹と植樹を繰り返し、今年9年目を迎えた。『お山の学校』は今、植樹によってクヌギやコナラが林立し、子どもたちが昆虫採集や植物観察に興じられる空間へと、静かに変貌の時を刻み始めている。



『お山の学校』の目玉は、それだけではない。憩いの空間を提供したいという企画で始まった「森の遊歩道」の整備、伐木資源を活かす「炭焼窯」の造営、夏の日差しと雨を凌ぐ「東屋」の建築、そして生態系の復活と観察のための「ビオトープ」造り。



ビオトープは、森の中、それも東西に伸びる谷あい位置し、きわめて珍しい立地条件にあって、景観的にも特異なものだと思う。平成23年4月から準備作業に着手し、1年目にビオトープの水源となる溜め池、2年目にはそこからビオトープ本体に至る約40mに及ぶ水路、3年目によりやくビオトープ本体、足掛け3年に及んだ整備作業も平成26年3月に完了した。



今後の展望として、里山と地域医療の再生に貢献するため、ビオトープの周辺に多種多様な薬草を移植することを企画中である。すでに、センブリやシュンランが少しずつ根付き始めている。また、自生したタラの木やこごみ、ぜんまい、わらびなどの山菜が芽吹き、ビオトープの周辺にセリが姿を見せる。シュレーゲルアマガエルの鳴き声に耳をすます季節はもうすぐそこに来ている。

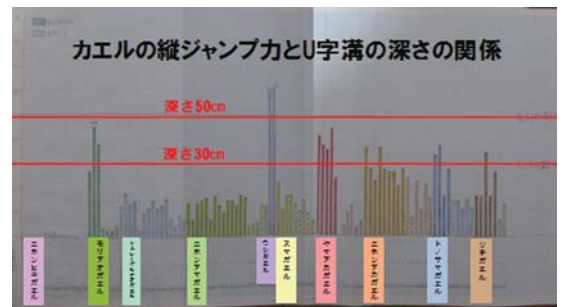


## 「里山の生き物を救う『お助け！シュロの糸』」

美祢市立大田小学校 6年 村田 結菜

私は、2年生の頃からカエルの研究をしています。3年生の時、田んぼの横のコンクリートのU字溝でカエルが流されていくのを見て、カエルにとってU字溝は危険な場所なのではないかと思い、カエルとU字溝の関係について調べてみました。10種類、109匹のカエルの運動能力のデータを取り「カエルのジャンプ力やくっつき力とU字溝との関係」をグラフにまとめました。

田んぼの周りでよく見られるU字溝の深さ30cmと、50cmのラインをグラフに引いてみると、縦ジャンプ力で30cmを超えるカエルは少なく、また、それを超えられたカエルでも、50cmを超えることはできませんでした。ニホンアマガエルやシュレーゲルアオガエルなど、吸盤のあるカエルは、U字溝をはい上がることができますが、トノサマガエルやニホンアカガエルなど吸盤のないカエルは、はい上がることができません。また、「U字溝の水の流れの速さとカエルの関係」の実験では、吸盤のあるカエルでも、水の流れが速いと流されて壁にくっつけず、U字溝から上がれないということが分かりました。U字溝に落ちて上がれないカエルは、水量が多く流れが速いと、一気に流されて溺れたり、疲れ果てて死んだりします。また、水のない時は、干からびて死んだり、他の生き物に襲われたりします。カエルは自力でコンクリートのU字溝から上がることは難しく、U字溝は、カエルにとって危険な場所だということが分かりました。私はその現状を知り、カエルを助けたいと思いました。そこで作ったのが「お助け！シュロの糸」です。これは、シュロという木の皮の繊維を三つ編みにして作ったものです。カエルが登ったり隠れたりしやすく、自然に優しく、お金があまりかからないところが良いところです。家での実験では、上手に登るのを確認していたので、去年は実際にU字溝で調査をしました。28回の調査で、計257匹のカエルがシュロの糸を登りました。カエル以外にも、アカハライモリなど色々な生き物がシュロの糸を活用していました。また、シュロの糸は、サギなどの天敵や暑い日差しから、カエル達の身を守ってくれることも分かりました。シュロの糸は、コンクリートのU字溝に落ちたカエルの手助けになることが実証できました。私は、カエルの研究をしながら、小さな命が人間の都合で失われる現実を見てきたので、せめてコンクリートのU字溝に落ちたカエルだけでも救いたいと思い、「お助け！シュロの糸」を考えました。私の活動はまだまだ小さなものですが、この活動を続けながら、コンクリートのU字溝で小さな命が失われている現状を、沢山のの人に知ってもらえるよう発信していきたいです。絶滅の危機にあるカエルや他の生き物の手助けにもなればうれしいです。今後も多くの人に協力してもらいながら、カエル達を救う活動をしていきたいです。ぜひ、皆さんも、田んぼのU字溝に目を向けてみて下さい。そして、小さな命の声を聴いてもらえたらと願います。



10種類、109匹のカエルの縦ジャンプ力の棒グラフに、U字溝の深さライン(30cm、50cm)の横線を引くと、30cmの高さを超えるカエルは少なく、また、30cmを超えられたカエルも50cmを超えることはできなかった。(ウシガエルは除く)

### U字溝に落ちたカエル達は...



### お助け！シュロの糸とは...

「お助け！シュロの糸」とは「シュロ」という木の皮の繊維を三つ編みにして作ったもの



# 忍び寄る外来生物の影

外来種とは、たとえばカミツキガメのように、もともとその地域にいなかったのに、人間の活動によって他の地域から入ってきた生物のことを指します。

同じ日本の中にいる生物でも、たとえばカブトムシのように、本来は本州以南にしか生息していない生物が北海道に入ってきた、というように日本国内のある地域から、もともといなかった地域に持ち込まれた場合に、もともとからその地域にいる生物に影響を与える場合があります。

## 近年、生息拡大が懸念されるヌートリア

ヌートリアは南米原産で、本来日本には生息していませんでしたが、戦前・戦後（～1950年頃）に防寒用の毛皮採取を目的として日本に輸入され、飼育が行われました。しかし、毛皮需要の減少とともに、その一部が野外に放逐されるなどにより、野生化して主に西日本を中心に生息域が拡大し、農作物や生態系に被害を及ぼしています。

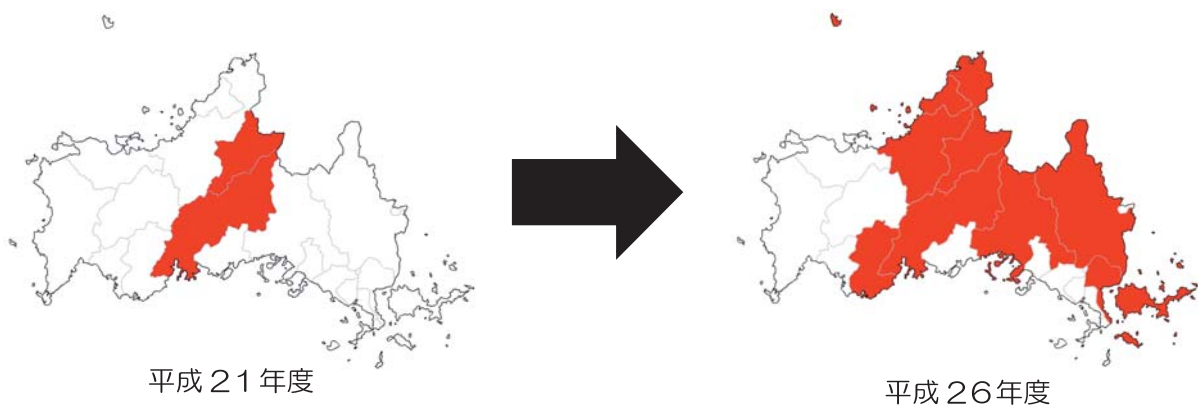
山口県では平成21年10月に山口市で死亡個体が初めて確認されました。次いで、萩市においても目撃・捕獲があります。さらに、平成25年度以降は目撃数・捕獲数が大幅に増え、宇部市、柳井市、岩国市、周南市、周防大島町及び阿武町において目撃・捕獲事例があります。

また、平成25年度にはヌートリアによる農業被害も確認されており、年々、その生息域が拡大していることがうかがえます。



捕獲されたヌートリア（島根県提供）

### ヌートリアの生息確認がされた市町



## 目撃情報をお寄せください

外来種の防除には、その生息域を把握することが重要です。

引き続き、ヌートリア・アライグマ等の外来種の生息情報を収集しておりますので、支援員の皆さまも、河川周辺等で目撃された際は、県自然保護課にご連絡をお願いします。

発行元：（公財）山口県ひとづくり財団 県民学習部 環境学習推進センター  
〒754-0893 山口市秋穂二島1062 TEL 083-987-1110 FAX 083-987-1720  
<http://eco.pref.yamaguchi.lg.jp/learning/>

